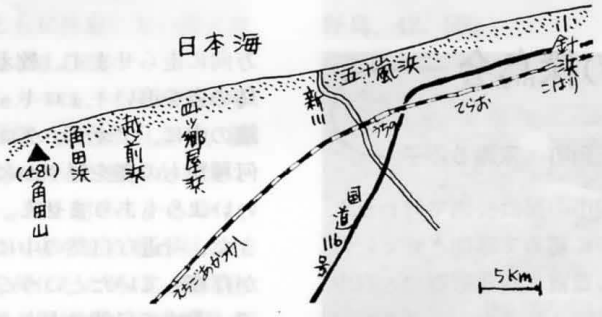
新潟県
支部報
'81年10月30日
No. 12（秋）

発行所　（財）日本野鳥の会新潟県支部
〒959－44　新潟県東蒲原郡津川町三郷乙1193番地
電話　02549(2)5045　渡部　通方

私のフィールド

冬の五十嵐浜

新潟市　曽我信男



今は秋、海水浴客でにぎわった砂浜は人影もなく、シギやチドリの楽園です。しかし、そのかわいらしいお客達ももうすぐ南の国へ渡っていってしまいます。そのあとに来るのは冬将軍、日本海は吹雪と北からの強風で荒れ狂います。今回紹介する私のフィールドは、新潟市の小針浜から五十嵐浜にかけての日本海岸です。この海岸は、ところどころ冬の荒浪で侵食されていますが、比較的広い砂浜になっています。時々、西蒲原郡巻町の四ツ郷屋浜、越前浜、角田浜まで足を伸ばすこともあります。

冬の海岸は、秋と比べて観察される野鳥の種類、数ともに激減します。小針浜から五十嵐浜、新川の河口まで歩いて、観察した鳥がシロチドリ２～３羽ということも多いのです。それでも日曜日が待ち遠しくてなりません。珍客に会えるかもしれないからです。新潟市上新栄町の海岸では、ユキホオジロを1979年２月26日（３羽）、1980年１月19日（５羽）と２年続けて観察することができました。

ユキホオジロは美しい野鳥ですが、足が短かく、両足をそろえてピョン・ピョンとはね、海岸に打ち上げられたゴミの中から採餌している姿は、ハツカネズミのようで、いささか滅滅させられました。また、今年の１月15日には、角田浜から越前浜にかけての海岸で、ベニヒワ、マヒワ、アトリ、ハギマシコの数羽という群に出合うことができました。強風の中、私の足元を白い腰を見せながら飛び去

っていったアトリには、野鳥にとっての冬の厳しさを見せられた思いがしました。

秋よりもさらに澄み渡った青空の下に、遠く佐渡ケ島が浮び、その前を長いカギになってウミウ、ヒメウが渡っていく。鏡のように平な海に白い眉をしたビロードキンクロが浮んでいる。そのような光景を見ると、冬の突き刺すような寒さも忘れてしまいます。

私が、冬の海岸をフィールドにしているのには、もうひとつ理由があります。それは、冬の荒浪に負け、生れ故郷に帰えることなく斃れた野鳥達を記録することです。これまでウミスズメ、コウミスズメ、フルマカモメ、ハシブトウミガラスなどを記録し、貴重な資料として私の所に保管してあります。

1981年1月15日、西蒲原郡の角田浜から新潟市の新川河口までに観察された野鳥は次のとおりでした。(天候　晴　11：00〜15：30)

ヒシクイ（7羽）、マガモ（1）、カモsp（4）、トビ（18）、ノスリ（2）、シロチドリ（14）、タゲリ（2）、ハマシギ（1）、ミユビシギ（25）、カモメ（1）、キジバト（10）、ヒバリ（17）、ハクセキレイ（17）、イソヒヨドリ（5）、ツグミ（1）、ホオジロ（16）、カシラダカ（66＋）、アトリ（±90）、カワラヒワ（75）、マヒワ（8）、ベニヒワ（15）、ハギマシコ（±57）、ハシボソガラス（45）

初めての探鳥会

西蒲吉田町　**深澤るみ子**

この春5月、新潟市の海浜公園で行われた「探鳥会」なるものに初めて参加させていただきました。自然の豊富な西蒲原郡のど真中に住んでいるくせに、スズメとムクドリの区別くらいつくにしろ、庭によく来る小鳥の名も知らないまま過ごしてきた私（たまに図鑑など調べてみても見分け方を知らないために「○○○」かしら？で終わってしまうのが常でありました。）にとっては願ってもない機会で、早朝眠い目をこすりつつも胸をわくわくさせて参加しました。野鳥の会の方を中心に多勢集まった市民の中に混じり、双眼鏡の見方も教えていただき、会員の方のかつぐ望遠鏡に驚きながら、小グループに分れ、いざ探鳥が開始されました。

鳴き声に耳をすまし（まだどれも同じように聞こえてしまい、「ああ、わかった！」と喜んでも再度それを耳にすると「あれ？」と混乱してしまいますが。）すばやく視線をその方向に走らせます。教えていただきながら、鳥の姿を追いキョロキョロする私……。双眼鏡の中に、アオジ、クロツグミ、ヒヨドリ等、何種類もの姿を鮮やかに発見した時の感激はいいようもありません。迂闊にも見過ごしてきた、身近な自然の中にあれだけの小鳥たちが存在していたということは全く新鮮な驚きで、改めて自然の大きさと多様性を知った次第です。

今後もひとつひとつ鳥の名前と顔が一致するよう努力する所存でありますので、何卒よろしくお導き下さいますようお願い申し上げます。

コノハズク（小野島）

第27回全国大会開催さる

新潟市　佐藤　弘

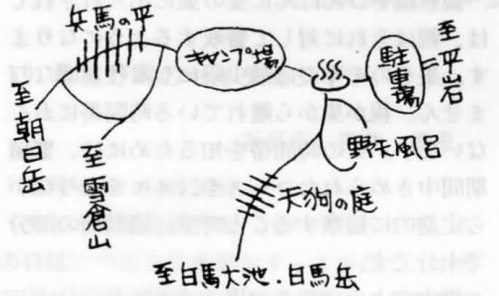
6月6日、桧原湖を渡るさわやかな風の中、国民休暇村で大会行事が始まりました。支部報告は、秋田県支部から森吉山のクマゲラ保護の経過が、埼玉県支部からは約600名の会員で、専従職員3名とパートタイム1名を有する、独特の活動内容が報告されました。そしてマスコミでも報道された、オオタカを密猟から守る栃木県支部の報告、並びにボランティアの応援呼びかけがありました。

翌朝の探鳥会は、会津銘酒の残り香？を慕うカやブヨを払いながら、五色沼ハイキングコースで3時間にわたり、音に聞く裏磐梯高原の鳥達に堪能しました。

（出席者　尾身秀雄　小松吉蔵　小松キソ　杵渕純一　山谷正喜　佐藤弘）

蓮華温泉探鳥会

糸魚川市　伊藤卓夫



平地では冬季に漂行して来るルリビタキ・ウソ・キクイタダキ等5・6種しか見られない亜高山鳥の探鳥会が7月4・5日に16名の参加者で行なわれた。降っていた雨も温泉が近づくにつれ止み、7時から親睦を兼ねての予習会ころには星が瞬くほどになり予習会終了後、ペンライトを頼りに野天風呂へワンカップと体を温めに行った会員がいたとか、いないとか。翌5日は絶好の探鳥日和、天狗の庭を目指して出発。道中、手が届くほどのコマドリやウソを見、姿は似ていてもそれぞれに鳴くホトトギスの仲間の声。嗄れ声のホシガラス。天狗の庭から望む鉢ケ岳、雪倉岳の残雪に影を落としてハチクマが悠々と舞っていた。ただ、イイですねーの一言。早朝より汗を流した後のおにぎりが小さく見えた。食事後は兵馬の平へと下りる者、しばし佇む人といろいろ。メボソムシクイがふる様に鳴く探鳥会でした。（確認した鳥）ハチクマ・キジバト・ジュウイチ・カッコウ・ツツドリ・ホトトギス・フクロウ・ヨタカ・ハリオアマツバメ・アマツバメ・アカゲラ・ツバメ・イワツバメ・キセキレイ・ビンズイ・モズ・ミソサザイ・カヤクグリ・コマドリ・コルリ・ルリビタキ・マミジロ・ウグイス・メボソムシクイ・センダイムシクイ・キクイタダキ・キビタキ・オオルリ・サメビタキ・コガラ・ヒガラ・シジュウカラ・ゴジュウカラ・クロジ・ウソ・カケス・ホシガラス・ハシブトガラス　計38種

四ッ郷屋浜探鳥会

新潟市　瀬尾　澄子

9月13日、にいがた野鳥の会と合同で行われました。去年の様な湧水により水たまりがなかったので、シギ、チドリの種類は少なかったが、トウネン、ハマシギ、キアシシギなど、基本種をじっくりと観察出来ました。

終って、時間の許す人は、クロツラヘラサ

ギ（12日確認）、アカツクシガモ（８月中旬より）に会いに、佐潟へ廻り、両種の他、オグロシギ、エリマキシギ等々、見るのに忙しい思いでした。参加50名

（確認した鳥）　コガモ　トビ　シロチドリ　メダイチドリ　ダイゼン　キョウジョシギ　トウネン　ハマシギ　オバシギ　ミユビシギ　キアシシギ　イソシギ　チュウシャクシギ　ユリカモメ　ウミネコ　アジサシ　キジバト　ヒバリ　ショウドウツバメ　ツバメ　ハクセキレイ　イソヒヨドリ　オオヨシキリ　セツカ　ホオジロ　オオジュリン　カワラヒワ　ハシボソガラス　<28種>

◇

ツバメ調査について

南魚沼郡　木下　弘

55年度県支部の事業として県内産ツバメ類３種の分布（繁殖期の分布と繁殖地）を会員からのアンケートによっておこないました。その結果、県内で繁殖するツバメ類３種の分布域を郡市単位の図にまとまりました。

この調査をステップとして、春、南国から渡来してきた繁殖するツバメ類について、県内各地に散在する会員皆の観察データを寄り集めて、その生態をはっきりさせることを継続することになりました。

Ⅰ．ツバメの巣のなかのようすを記録する

県内全域に分布するツバメは、野鳥のなかで、最も簡単に巣を見つけることができ、巣内観察にも適しています。しかし、野鳥に関心ある人でも巣内を観察したことは、少ないようです。その理由は、巣をのぞくと親がこなくなる、というツバメへの思いやり精神があることと、巣の上部に人の頭を入れる空間がないので直接のぞくことが不可能なためです。

そこで、私が今までツバメ調査をしてきた経験からツバメをいじめないで巣内を簡単に観察する方法をお話したいと思います。

◦巣内観察の道具を作る

２ｍ位の棒の先に単車用鏡（廃品利用）をネジでしっかり取付けたものを、巣を壊さないよう慎重に巣上部へ入れる。巣内は暗いので懐中電燈の光を鏡に反射させます。

◦観察する地域と時間をきめておく

観察鏡をひんぱんに愛の巣に出入れされては、親はそれに対して警戒するようになります。巣をのぞくのは最少限にしなければなりません。親が巣から離れている時間帯におこないます。この時間帯を知るためには、繁殖期間中きめられたコースを、メモをとりながら定期的に観察することです。通勤前の30分で十分です。

◦巣内のようすをその場でメモする

観察したことは、その場で記録しておかないと、折角の観察がまったく価値がなくなります。繁殖の進行状況が一目でわかるようにしておくと、観察もれの防止に役立ちます。

初卵日、産卵後、孵化日、孵化数、巣立数など、一つの巣についてカードにまとめておけばあとで資料整理の際、能率があがります。

２回目繁殖が１回目と同じつがいによっておこなわれたかどうかを知るにも、調査域全体の繁殖進行状況の表から推定できます。

Ⅱ．高圧線や建造物に集結するツバメ類

残暑から朝晩の冷えこみが感じられる頃になると、いつしか、繁殖を終えたツバメ、イワツバメの群飛が目立つようになります。渡去途中と思われるツバメ類の大群が建造物に

とまって翼を休ませているのでしょうが、その数のものすごさにビックリすることがあります。

これらの大群が集まる時間、場所、天気など、毎年だいたいきまっているようです。

県内各地、いつ、どんな場所で、何羽位が何という種が、どんな状況であったか、報告を集めれば、ツバメ類が新潟県を通過していくようすを知ることができそうです。

イワツバメと県内では繁殖していないショウドウツバメについて、その渡去時の生態について両種の識別がはっきりしていないことなどで、今まで不明なことが多かったようですが、会員の皆からの観察データが解明してくれると思います。

参　考　文　献

・内田康夫〝ツバメの観察〟自然の教室 No.126
　私たちの自然　日本鳥類保護連盟
・長谷川和正〝燕市の名の由来〟 県支部報No.5
・木下　弘　ツバメがやってくる　ルーペNo.4
　六日町理科教育センター
・日本野鳥の会新潟県支部　新潟県におけるツバメ類3種（ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ）の分布－Ⅰ．繁殖期の分布と繁殖地

◇

《特集　珍鳥途来!!》

1）鳥屋野潟のセイタカシギ

新潟市　白井　康夫

7月4日　14時30分

久しぶりに鳥屋野潟へ出かけたところ、この日はいつもより水量がずっと少なく、中州の回りは広い干潟ができて水鳥にはとても良い条件だった。

プロミナーで、シロチドリ、サギ等を、観察していたところ発見。赤くて長い足、白い下面、背は黒と美しい姿は、まぎれもなくセイタカシギである。

餌をさがしながら、水際を歩き回り、深い所まで行くと、また浅瀬まで飛んで来るというパターンをくりかえし採食していた。

図鑑と照合したところ、雌の成鳥であり、付近を見回したが、雄の姿は見られなかった。思わぬ珍鳥の出合であった。

2）クロツラヘラサギ鳥屋野潟に渡来

新潟市　小松吉蔵　瀬尾澄子　佐藤弘

珍鳥クロツラヘラサギ1羽が、7月10日鳥屋野潟で観察された。風間辰夫氏によれば、県内では1956年11月1日に横越村で死体が拾得されたことがあり、今回が2度目の記録との事である。わずか4時間程の滞在で飛び去った。

●体形・姿勢

他の白サギ類に比べ、胴はズングリし直立形ではなくかなり横向き、首と足は太くて短かめ。巾広く先端がシャモジ状の特徴的な嘴長髪のようにボサッとした冠羽がある。

●色彩

羽毛は全身白色、飛翔時の翼先端に黒色がある。足と嘴は黒、目を含み額迄黒い。

小松は水路続きの清五郎潟において50～60mの距離で観察し、嘴の前半分程に黄色味があり、その中に黒の横縞が多数あること、目先にも黄色があることを確認した。

又、羽毛はダイサギの如く透き通るような白ではなく、少しボケた白と表現する。

●採餌行動

水中につっこんだ嘴を左右に振る独特な動作。かたわらのダイサギが、突きで魚をねら

うのと好対象。

クロツラヘラサギ（撮影：常山秀夫）

3）今夏、新潟空港でオオセッカ、オオジュリン、チュウヒ、ベニマシコを観察

新潟市　千葉　晃

新潟空港と阿賀野川河口左岸一帯は広々とした草地で鳥影も多く、私の好きな探鳥地のひとつです。このあたりはコアジサシ、シロチドリ、オオヨシキリ、コヨシキリ、セッカ、ヨシゴイなどの繁殖地として利用されていますが、今夏（7・8月）珍客がみられたのでお知らせします。

オオセッカ：　7月18～24日、滑走路脇のアシ原でさえずる雄一羽を観察。草丈約1.5mのイネ科植物の茎をソングポストに利用し、大きなよく通る声でジュビジュビジュビジュビジュビと鳴き、時々鳴きながら3mほどの高さに舞い上がっては元の茎にもどる動作を繰り返した。繁殖の確証は得られていない。

オオジュリン：　7月18～8月16日、前種を見た同じアシ原でさえずる夏羽の雄成鳥2羽（このうち1羽は右足にアルミニウム製の足環が付けられていた）の他、餌を運ぶ雌成鳥2羽と巣立子と思われる雌型の個体2羽を観察した。足環の付いていない雄はさえずり活動が活発で、アシ原内に数カ所のソングポストを持っていた。巣は確認できなかったが上記した状態から繁殖は確実と思われる。

チュウヒ：　7月18日～8月16日、新潟空港内の別のアシ原で雌成鳥一羽を約5回目撃した。飛び立ってもすぐアシ原に舞いおりることが多かったが、8月1日の朝は空港内を広く飛び回り、餌をさがしている様子だった。

ベニマシコ：　8月16日、空港内の日本海に面したアシ原で地鳴きをしながら飛びまわる雄成鳥一羽を観察した。羽衣の紅色はひときわ鮮明で美しかった。しかしチュウヒと同様、繁殖の確証は得られなかった。

上記の他、チョウゲンボウ（2羽）やハヤブサがみられ、シギ・チドリ類も少なからず渡来しました。

4）アカガシラサギ

新潟市　高辻　洋

7月11日8時ころから、佐潟荘の先の開けた場所で三脚を立て、白いものを中心に焦点を合わせていた。狙いはもちろんクロツラヘラサギであるが、いやにゴイサギの幼鳥が目につく。前方へ続く松林の手前の水際を見るとゴイサギの幼鳥の隣に見慣れない鳥がいる。背丈はゴイサギの半分くらいで体型はヨシゴイを少し太らせたような感じである。背は灰黒色で頸から上は茶褐色、喉から胸にかけて白っぽい縦斑がある。嘴は長く黄色で先端は黒く、はばたいた時翼は純白であった。何であるかまったく見当がつかず、まだ見たことのないサギ類の幼鳥か何かだろうくらいに思いながらノートに特徴をスケッチしておいた。翌日県自然保護課の本間先生に見てもらったところ、即座にアカガシラサギだろうとの返事をいただいた。ただ、図鑑にあるゴイサギとアカガシラサギの体長の差にくらべアカガシラサギのほうがずっと小さく見えたこと、図鑑ではダイサギのように首を長く描いたものが多かったことから半信半疑であったが、頸の伸縮で見かけが違うことは十分あるだろうとの本間先生のお話と、高野伸二さんの図鑑に見たとおりの絵が載っていたことから自分なりに納得した次第である。だとすれば新

潟では十数年ぶり二度目とのことで、これだから素人は何をしでかすかわからないと我ながら恐縮している。

（追）10月16日～17日にかけて粟島で宮越・曽我・小野島によりアカガシラサギ冬羽1羽が観察され、写真映影もすることができた。

5）アカツクシガモの飛来について

新潟市　**曽我　信男**

1981年8月18日、新潟市赤塚の佐潟において、アカツクシガモ1羽を観察したので報告します。

同日の天候は晴、1000ミリのレンズをかついで佐潟へ野鳥の写真を撮りに行ったところ赤塚派出所から約200メートル離れた水田にカルガモ4羽の群とともに休息しているアカツクシガモ1羽を発見しました。

休息時のアカツクシガモは、カルガモより少し大きいくらいで頭部の淡色が目立ち、胴体部の赤褐色と風切羽の黒とが鮮やかなコントラストで大変美しく、頸を縮めている時は、頸の中央部に細いがはっきりした輪が見られました。しかし、頸を伸ばした時は、輪は出ず、頭部からの淡褐色と胴体からの赤褐色の段のように見えました。

写真撮影のため、約50メートルに近寄ったところ、カルガモとともに飛び立ちましたが、アカツクシガモ1羽のみが佐潟の上空を旋回し、飛び立った地点から約70メートル離れた佐潟の湖面に舞い降りました。飛翔時はカルガモより一回り以上も大きく見え、はばたきはガンの仲間のようにゆるやかでした。また上面、下面ともに、黒い風切羽と白い雨覆い羽のコントラストが鮮やかでした。

最近、飼育されていた鳥が逃げ出して野外で観察される例が多いが、本個体は飛翔力が強く、風切羽に大きな破損もなく、警戒心も強いため、野生のものと思われます。

アカツクシガモは、本州、佐渡、九州などに数の少ない冬鳥として渡来しますが、本県では、これまで、1933年に長岡で捕獲されたのをはじめ、数回の記録があります。

1977年に愛知県渥美郡田原埋立地で越夏した記録があります。

9月13日の四ツ郷屋浜探鳥会に続いて行われた佐潟の探鳥会では、クロツラヘラサギとともに姿を見せ、参加者をよろこばせました。

参考文献

1）高野伸二、柳澤紀夫（1979）野島図鑑、日本鳥類保護連盟

2）日本鳥学会（1974）日本鳥類目録第5版学習研究社

3）風間辰夫（1976）続にいがたの野鳥、野島出版

4）山形則男(1976)短報(アカツクシガモ)、野鳥、42、660

アカツクシガモ（撮影：曽我信男）

6）コジュリンとツバメチドリの観察

村上市　**宮越　一俊**

8月2日、福島潟。真夏の太陽の下でホオジロの声に似た、それよりも更に張りのある三音節の聞きなれない声を聞いた。声の主はコジュリンであった。ギシギシの枯れ穂の先にとまって盛んに囀り、時には地上におりても囀るコジュリンをみて、ホオジロ等とは大部習性が違うと思った。この日は雄1羽が観察されただけであるがその後県支部のメンバーによって雄2羽、雌1羽が確認された。福

島潟での繁殖の可能性もあるのではないかと思われたが今年は確認されなかった。この点については来年以降の観察に期待したい。

※

同じく8月2日、福島潟で5羽のツバメチドリを観察した。5羽とも幼鳥タイプであったが成鳥も7月末頃には換羽して幼鳥羽になるらしいとのことであるから成鳥が含まれていたかどうかは不明である。尚、翌3日には7羽が観察された。ツバメチドリはほとんど何も生えていない畑（裸地）を好むらしく、その後も同じ畑で観察されている。餌はトンボが多く、トンボが飛んで来ると低く体をふせて近づくのを待ち、パッととびついて捕える光景が時々観察された。ツバメチドリについても福島潟での繁殖の可能性が考えられるが今のところは不明である。

ツバメチドリ（撮影：曽我信男）

コジュリン（撮影：常山秀夫）

住所変更のお知らせ

・池田　国夫（新）〒942　上越市春日新田2丁目23—25　協和化工機アパート　1棟2F4号

・佐藤　弘（新）〒950—21 新潟市松海が丘2丁目13番3号

・箕口　秀夫（新）〒950—21 新潟市五十嵐の町9114　第7みどり荘2号

・永井　武（新）〒950 新潟市山木戸3丁目2番8号

・深沢るみ子（新）〒959—02 西蒲原郡吉田町学校町5049

新入会員の紹介

下記の方々が新入会されました。探鳥会でお待ちしています。鳥だより、写真、スケッチなど気がるに事務局までお願いします。

・199 岩島裕子　951 新潟市関屋恵町4—5 早福荘

・200 小林義久　940 長岡市希望が丘南5丁目7—27

・201 河村繁雄　950 新潟市大形本町1丁目3の4号

・202 箕輪貴一　940—02 栃尾市小貫1015—1

▶編集後記◀

昭和56年、酉年。1月15日に岩船港でコクガン、ハイイロヒレアシシギを観察して以来、5月の粟島でのわが国初記録のタカサゴクロサギの観察など、春から夏、夏から秋にかけても珍鳥の渡来があとをたたず、今回はその数々を特集しました。これもひとえに野鳥を観察する皆さんが増えたことが第1と思われます。これからも身近かな場所を中心に観察を続けて下さい。思わぬ収獲が得られるかもしれません。　（編集部：小野島学）